

日本学術振興会研究拠点形成事業（A. 先端拠点形成型）
中間評価（平成29（2017）年度採択課題）書面評価結果

日本側拠点機関名 京都大学野生動物研究センター（教授・幸島 司郎）
研究交流課題名 大型動物研究を軸とする熱帯生物多様性保全の国際研究拠点

評価結果（総合的評価）	
<input type="radio"/>	A 想定以上の成果をあげつつあり、当初の目標の達成が大いに期待できる。
<input checked="" type="radio"/>	B 想定どおりの成果をあげつつあり、現行の努力を継続することによって目標の達成が概ね期待できる。
<input type="radio"/>	C ある程度の成果をあげつつあるが、目標達成のためには一層の努力が必要である。
<input type="radio"/>	D 成果が十分にあるとは言えず、目標の達成が期待できないため、経費の減額または中止が適当であると判断される。
所見	
<p>相手国拠点と共同で熱帯性の大型稀少動物の保全に関わる生態および行動研究を精力的に進め、学術的価値の高い成果が得られた点は評価できる。相手国拠点との国際セミナーをはじめ、多岐にわたる交流実績があり、熱帯諸国間の研究者交流の基幹の役割を果たしている。また、本課題のセミナーを契機としてキルギスとの国際共同研究を開始することになったことは波及効果とみなせることから、目標達成に期待が持てる。研究成果に関しては、分野・研究対象を考えると、2年間で多くの成果が生み出されるもの、インパクトファクターの高いジャーナルへの成果が求められるものでもないのかもしれない。それらのことを差し引いても、論文という有形の成果はもっとあってしかるべきである。</p> <p>若手研究者育成の観点では、実績が着実に上げられている。ただ、国内の大学院生、PD研究員の育成ができていくかについて、学会発表後論文化するまでのプロセスを含め、自己点検することが強く求められる。また、若手研究者対象のセミナー、シンポジウムでは、受講対象を広げ、他大学の若手研究者にもよい刺激を与える波及効果を期待したい。</p> <p>今後の研究交流活動計画は、熱帯生態系における生物多様性の保全という方向で、個々の研究、活動をどのように有機的に結びつけていくかが課題である。また、このプロジェクトで目指している野生動物の保全、さらにその彼方にある生物多様性の保全は、アンブレラと称している種の「生息地」の保全のもとに成立すると考えられるが、研究対象としている種と生息地環境との関係を明らかにすることを目指した研究が少なく、この側面からの研究の進展が期待される。</p> <p>経費負担面では、対等な研究交流が達成されておらず、相手国拠点の経費による受入を増やすことを期待したい。さらに、ブラジル、中国、英国との研究成果が認められないことから、これらの国との論文公表および学会発表につながる成果が期待される。</p>	